

## 退職園長による子育て塾(2)

# たくさんのお会いと発見

戎 喜久恵

### にじサタデーの朝

にじサタデーの朝はゆつくりと始まります。九時頃に私が部屋の鍵を開け、きょうの生活の場を整え始めます。きのうまでは別の目的で整えられていた部屋からです。

その頃から親子が来始めます。挨拶を交わすとすぐ

きょうの生活の場作りに参加してきます。

「きょうは絨毯があるかしら」

「きょうは、草だんごを作るから、汚れるかしらね」

「おやつの時間に敷きましようか」

「それがいいわね」

「お茶は熱いのがいいですよね」

「私、やります」

と、台所にかけていきます。子どもが後を追っかけます。

「きょうは部屋で遊ぶ子は少ないようね」

「おだんごは、どこで作りますか。机はいくついるかしら」

「おやつ作りをしてからタケノコ掘りですよ」

など、次第に参加してくる子どもの年齢や遊び始める様子を見ながら親たちと生活の場を整えていきます。

次回のおやつと中心になる活動を予告しておくので親たちはそれぞれにきょうの子どもたちとの生活が充実するように話し合いながら自分の役割を見つけて動いています。子どもたちも手作りおやつには興味を持ち進んで準備に参加してきます。きょうはじめて参加した方も先輩を見習いながら自分の生活をつくっていきます。

スタッフがすべて準備するのではなく、ここで過ごす子どもの姿を思い浮かべながら、みんなできょうの

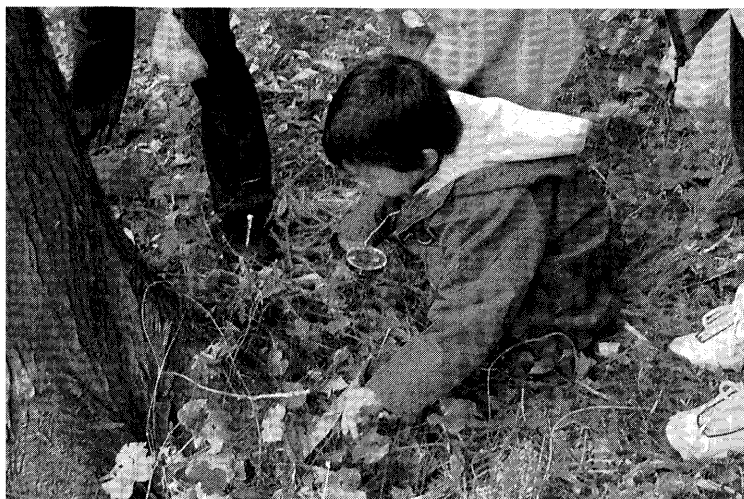
生活の場を創っていくことを大切にしています。

このことがきょうの終わりに「この机、役だったわね」とか、「次は、こんなにした方がいいわね」など、次回の生活を充実していく基になっていくようです。

### お散歩大好き

子どもたちは散歩が大好きです。まおくん（三歳）は、

「＼にじサタデー＼でいちばん楽しいのは山へお散歩。大きいミミズがおった（いた）のが、すごーいおもしろかった。今度はお芋をみんなで掘って、おいもごはんを食べたい」と、言っています。お芋とは山芋のことです。十一月の散歩で山芋のつるになっている小さなムカゴを見つけて「これなーに」と興味を持ったので、食べられることを伝え、食べ方を話したところ、母親も興味を持ち、家に持ち帰ってムカゴご飯にした



▲野イチゴ発見

そうです。カレーライスやハンバーグで育っている子どもの口に合うものとは考えられませんが、「食べてみたい気持ち」が「おいしいムカゴ」にしたようです。同じ頃、絵本『14ひきシリーズ』（いわむらかずお 童心社）に出会い、次のお散歩は山芋堀りをしたいと熱望しているのです。

の亜ちゃん（二歳）が浅い小川をのぞき込んでいます。近寄って同じようにのぞきましたが何もいません。三月の小川の水は冷たそうです。「何を見ているのかしら」と、しばらく同じようにしゃがんですんだ水の流れを見ると、の亜ちゃんのかすかな反応が伝わってきます。山水に流されてきた朽ちた木の葉が浅瀬で小石に引っかかって、しばらく留まってはくるくると回って流れていくのです。くるくると回るたびにうれしそうに小さな声を出します。小石に木の葉がかかると今か今かと目が離せないのです。一枚一枚みんな違うダンスをするのです。次の木の葉がかか

るまでじっと待っているのです。

かずま君（六歳） ははじめの頃散歩が好きではあり  
ませんでした。

「なーんにも、面白くなんかない。網が無いから何にもとれないよ。ただ歩くだけなんかつまらん」と、言うのです。かずま君は市街地で育ち、自然との付き合い方や自然の楽しみ方をつけていないようなのです。網と虫かごを持って虫取りを、バケツと網を持って魚採りと目的を持った戸外遊びしか経験してないようなのです。そこで、「目があるから大丈夫。手があるから大丈夫。私が子どもの頃はこうやって……」と、クローバーの咲いているところに行きました。小さなシジミチョウが舞っています。「見ていてね」と、シジミチョウをひょいとおまんこに見せました。驚いている彼に「ほらね、網なんかいらないでしょ」と、見せました。簡単に採れると思った彼は自分もと試みますがうまく採れません。しばらくして、「教え

て」と、自分で捕まえた気持ちを実感してきたので「蝶を捕まえたと思ったら、蝶のことをよく知らなくちゃ。よく見るとわかるよ。お花にとまた蝶は、羽を閉じたり……開いたり……、いつ、つまんだらいいかな……ほらっ」とタイミングをとらえて採って見せました。すると、一回一回慎重に試み始めました。今度は蝶をよく見えています。失敗すると首をかしげて失敗の原因を考えているようです。数回の後に成功しました。周りにいる者に見せて歩きました。その後、「この蝶、どうしよう」と、差し出すのです、「どうしたいの」と、たずねると「にがしてやる。そして、また採りたい」と、蝶を放す。放さないと手が使えないこと、また採れるという自信、指の間で細い足を動かしてもがいている蝶への心持ちなどさまざまな思いがそうさせたのでしょうか。網や虫かごがあるところうはならなかったでしょう。網をむやみに振り回して虫や草を痛めたり、虫かごの中で死なせてしまっても

「残念」で終わるでしょう。

この日の夜、「あのなパパ。先生がコツ教えてくれたよ。シジミチヨウはとまったら羽を閉じたり開いたりするから、こうやって、閉じたときにさっとつかむと飛ばないから捕まえられる訳よ」と、得意そうに話したそうです。

「虫、嫌いでなくなつた」という我が子を見て、「今まで私たちが長男は虫が嫌いだと思いこんでいたことは何だったのでしょうか。徳島の田舎とはいえ、市街地に暮らす彼らにとって、『にじサタデー』の周りの田圃や小川は未知の自然界であったのだろうか。それにしても自然に対して腰の引ける長男の様子や否定的なことを言つて自分の心の課題から逃げようとする態度に父親としての責任を痛感した。夏休みには出来る限り時間をつくつて海や川や山に出かけた」のだそうです。そして、「海に釣りに行つて感動したこと。いつもは家の中で弟に意地悪したりちょっかいばかり出し



▲ほら、バッタの赤ちゃんみつけた

ている長男も、ごうごうと唸る風や波のしぶきの前では必死に弟を守ろうとする。大自然の前では人間は小さく非力であるのが実感できるし、そこでは助け合ったり励まし合ったりする優しさが自然に現れてくるのだろう。にじサタデーの田圃や小川や裏山はそんな大自然へつながる入口のように思われる」というメッセージをいただきました。

何かのためにという目的を持たないで、いいお天気だから、いい空気だから、ぽかぽか暖かいから、雨が上がったから、と出かける散歩はさまざまな自然の事象や現象に出会わせてくれます。草原にこんもり盛り上がった土の小山を発見し、モグラの地中でのくらしを想像したり、蜘蛛の子を散らしたように小さくぴんぴんとして飛び跳ねるバッタの赤ちゃんの誕生やトンボの羽化の様子に見入ったり、道ばたの小さな野草で作った小さな小さな花束を母親にプレゼントしたり、

植えたばかりの水田に小さなオタマジャクシを見つけ、両手ですくったり、裏山では野イチゴを口に含んだり椎のみを食べたりと、あつという間に半日は過ぎていきます。それぞれの子どもが新しい発見に感動し、その感動を仲間や親に伝えます。自然の中では子どもたちは伸びやかです。穏やかです。飽くことを知りません。ゆとりを持って対象をよく観察し応答しています。むやみに殺生をしません。そんな子どもたちを見て母親は「家の中では私にくっついてばかりで、一人では何もしようとしませんが、ここに来ると目が生き生きして、私は相手にしてくれませんか。うれしいです」「自分の子なのに、ここに来ると、こんなことが出来るのか……と新しい発見があります。楽しみです」と話しています。急がされないゆったりとした時間と、自由感があり自分の意志でかわれる自然と、共感し認め合う仲間があります。お散歩は子どもも親もそして私たちも大好きです。子どもと過ごす幸せを

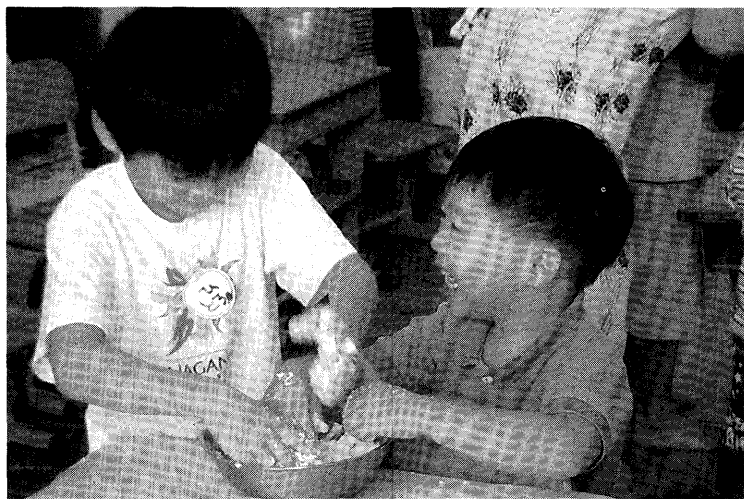
ともに味わわせて頂いています。

### おやつ作り

自分たちで季節をおやつや料理にすることを大切に  
しつつ楽しんでいきます。「うちの子、タケノコ食べな  
いのです。どうしよう」といわれていた子が五杯もお  
代わりをして母親を驚かせたり、顔中粉だらけになっ  
て夢中になっている子どもの笑顔に「男の子がこんな  
におやつ作りを喜ぶなんて知らなかったわ。家でも  
やってあげましょうね」と感動したり、米の粉に水を  
加え耳たぶくらいに練って丸めてお湯に入れるだけの  
お月見団子に「あら、こんなに簡単なんですか」と唾  
然としたり、毎回のおやつを中心とする簡単な食べ物  
作りは、親も子も楽しみにしています。ヒットメ  
ニューをあげてみます。

\*

一月 ヨモギを摘んで「草餅」



▲お月見団子作り

春の香りがします。

二月 畑の大根、ネギ、人参を使って「豚汁」

取れたて野菜がおいしいです。

三月 「ホットケーキ」と「イチゴ」

摘みたてイチゴの味は格別です。

四月 「タケノコご飯」

掘ったばかりのタケノコでタご飯もアンコールです。

五月 柏、シナモン、サンキラの葉でくるんだ

「かしわもち」

香りを楽しみます。

六月 「流しソーメン」

竹藪の竹で流します。箸でゲットするのも、流すのも楽しみ。

七月 プールサイドでスイカ割りをして「すいか」

「七タ団子」

八月 新米を炊いて「おむすび」

九月 栗を拾って「栗ご飯」と「月見団子」

時には芋ご飯も。

十月 なんと金時の「焼き芋」「みかん」

ホットプレートが手軽で楽しい。

十一月 「おむすび」を持って紅葉狩り

大小好みのものを作って。

十二月 「おもちつき」(芋もち、しぶ柿もち)

「ケーキ・クッキー」

\*

子どもたちの生活に身近な素材や自分で収穫した物を活かして取り込んでいくようにしています。「汚して大変」と考えるのではなく、楽しんで作って、おいしく食べて、「おいしかったねー。また一緒に作ろうね」と自分たちで作った喜びを語りながら感謝をして片づけることを大切にしています。「ええつ、そんなこと出来るの」と我が子の新発見をしている母親の視線を感じながら子どもたちも自分で出来ることを見つけて



▲タケノコ掘り

片づけています。子どもが喜ぶ簡単料理をもっと教えて欲しいという母親もいます。

### タケノコ掘り

四月はタケノコのシーズンです。にじサタデーの裏山には竹藪がいっぱいあります。地主の方の好意に甘えて毎年タケノコを掘ります。はじめての経験の方も二度目の方もそれぞれの経験をしています。ここしばらくは佐藤さんの山に入ります。「たくさん生えすぎるので採ってくると藪が良くなる」と竹藪までの道はあらかじめ点検して下草を刈ってくれています。当日も必ず参加してくださって親子とのふれあいを楽しんでおられます。ソーメン流しの竹切りは佐藤さんが頼りです。

(神戸女子大学)